

第 1 章

風 証 論

第1章 風証論

1 風と風証の基本概念

「風」は気圧の分布の不均衡により生じる一種の自然現象である。風には季節による一定の規則性があり、たとえば春は東風が多く、夏は南風が多く、秋は西風が多く、冬は北風が多くなる。また風がどこから吹いて来るかによって、春暖かく、夏熱く、秋涼しく、冬寒いなどの気候の変化が生まれる。

中医学の「風」には2種類の概念がある。1つは病因「六淫」の1つである「風邪」、もう1つは病証の1つ「内風」である。外感風邪（外風）も内風ともに風証を引きおこす病因である。

「天人相応」学説によると、人類は自然環境の中で様々な気候の影響を受けながら、人体の生理機能を調節し、人体の生、長、化、収、蔵などのはたらきを促進させているという。たとえば『素問』四気調神大論に「春三月、これを発陳^{*1}といい、天地ともに生じ、万物もって栄える……夏三月、これを蕃秀^{*2}といい、天地の気交わり、万物華さき実る……秋三月、これを容平^{*3}といい、天気は急をもつてし、地気は明をもつてす……冬三月、これを閉蔵といい、水氷り地さける、陽を擾す事なかれ……」とある。これは風気が四季おりおりの自然界を調節していることをいい表している。

気候が正常な時、人体はこれに適応し、その結果気血は旺盛になり、身体は健康を保つことができる。それに対し、気候が異常な時は、人体はこれ

に適応できないもしくは適応が難しく、その結果陰陽の過不足が生じ、様々な疾病が引き起こされる。たとえば「傷風」「風寒」「風熱」「風濕」などを生じるのである。ここでいう「風」とはもちろん感冒などの「外風」である。

しかし人体に対し最も害が大きいのは、じつは「外風」ではなく、人体内部から発生する「内風」である。では「内風」はいったいどこからやって来るのであろう？ 『素問』至真要大論に「諸風掉眩，皆肝に属す」とある。内風の起源は肝にあると『素問』は述べているのである。「肝風」という固定した呼称もこれを裏づける。

さて「肝風」の発生には「肝陽化風」「熱極生風」「血（陰）虚生風」の3つの状況が想定されている。肝陽化風では肝陽が亢盛し、肝陰が肝陽を抑制できなくなった結果風が生じ、熱極生風では高熱あるいは久熱〔慢性的に滞留した熱〕が肝経を焼灼し、そのため肝陰が損なわれ、肝陽が偏亢〔不均衡に亢進〕し、筋脈が栄養を失った結果風が生じ、また、血（陰）虚生風では肝（腎）の陰血が虚衰し、肝陽が亢盛した結果風が生じる。3者は臨床症状にそれぞれ特徴をもち、発病の起点にも違いがあるものの、病機に関して見ると、ともに肝陽（気）亢盛およびこれと相対的な肝陰（血）不足が存在している。「内風はすなわち身中の陽気の動変なり」といわれるゆえんである。肝陽が制御不能に陥り、陽熱が亢盛すると風が生じ暴れ回るのである。

外風と内風は、互いに影響しあい、原因と結果としてリンクすることも多い。たとえば温病では、前期には外風による病変が主となるが、化熱により陰が焼灼された後期には陰液の消耗により内風が現れる。

* 1 発 陳：新しく生まれること。陳の解釈には2通りある。1つは古いという意味にとり、古いものを捨て新しいものが生まれると解釈し、1つは広くさらけだすと解釈する。いずれの解釈を取るにしろ全体の意味は変わらない。

* 2 蕃 秀：草木などが美しく生い茂ること。

* 3 容 平：万物の形態が安定すること。

2 歴代医家の風論

① 『黄帝内经』

『素問』には風に関する論述が非常に多い。その上、とくに「風論」篇を設け、風の病理作用について詳述している。

『素問』風論篇：

「風の人を傷つけるや、あるいは寒熱となり、あるいは熱中となり、あるいは寒中となり、あるいは癘風となり、あるいは偏枯となり、あるいは風となるなり。その病おのおの異なり、その名も同じからず、あるいは内りて五臓六腑に至る。」

『素問』風論篇：

「風は善くめぐりたびたび変じ、腠理開けばすなわち洒然^{*1}として寒し、閉じればすなわち熱して悶ゆ。それ寒すれば、すなわち食飲衰え、それ熱すれば、すなわち肌肉消す……。」

『素問』風論篇：

「故に風は、百病の長なり、至りてそれ変化し、すなわち他病をなすなり……。」

また『素問』では、「肺風」「心風」「肝風」「脾風」「腎風」「胃風」「首風」「漏風」「泄風」などの風証が紹介されているほか、予防に関しても論及されており、風の侵襲を避けるよう注意を促している。

『素問』上古天真論：

「虚邪賊風、これを避くるに時あり。恬憺虚無^{*2}なれば、真気これにしたがい、精神内に守る。病いずくんぞ従い来たらんや、と。」

風邪が人体に侵入するときには、虚に乗じて入るものであり、心安らかに身体を健康に保てば、賊風は侵入することができず、疾病もおこらない、と説明している。これは現代の予防医学にも応用すべき真理を含んでいる。

* 1 洒 然：寒い様子を表す。

* 2 恬憺虚無：精神が安定し雑念のないこと。